教育思想に関する学生のコメント（一部転載）

Ａ

私は、ルソーの教育思想の特質を説明しようと思う。教育の思想とは、教育活動について考えられたことを体系化したものである。それは人間(子ども)をどうとらえるかという人間観(子ども観)によって基礎づけられている。人間の本性を押さえつけず、人間の本性に従った教育の在り方を説く新しい人間観（子ども観）が誕生することになった。その代表といえるのが、放浪の思想家ともいわれたルソーの教育思想である。

ルソーは、人間の本性を押さえつけず、人間の本性に従った教育のあり方を説く新しい子ども観を誕生させた。主著『エミール』では、子どもを単なる未完成の大人とみるのではなく、子どもには固有の活動がある、子どもには自ら成長発達しようとする内在的な能力が備わっている、として、「合自然」の立場から教育のあり方を提言し、内なる自然に従って教育を行うべきだと説いた。ルソーは、教育に関する著者『エミール』で、子ども中心の教育思想を展開したので、「子どもの発見者」と呼ばれている。

私は講義を受けるまで、教育思想家について全く知らなかった。今回は名前が聞いたことのあるルソーを選び、書いたのだが、他の思想家達についても時間があるときにまとめてみようと思う。私はたくさんの思想家がいて様々な思想があるから今の教育が成り立っているのだと考えた。なので、教員になる前に教育思想について学ぶことはとても重要であると思う。

Ｂ

私は、「ジャン＝ジャック・ルソー」についてまとめます。ルソーはある程度の人が聞いたことがあると思います。中学校、高校の教科書には必ず登場し、フランス革命、民主主義、近代教育思想に多大な影響を与えた啓蒙思想家として紹介されています。ルソーの教育論『エミール』についてです。『エミール』とは、ルソー著作の小説風教育論のことです。正式名称は『エミール、または教育について』小説的な構成をもつ斬新な教育論『エミール』は1762年に刊行されました。『エミール』では理想となる教育プランを構想していて、ルソーは自分を教師として位置付け、架空の孤児「エミール」をマン・ツー・マンで育成する思考実験を行い、教育を理論化しようとしました。なぜ、『エミール』が子どもの発見の書といわれているのかは、その時代の子育てから読み解くことができます。この時代、子どもというのは、「小さな大人」として見られていました。子どもは大人よりも弱く、物わかりの悪い存在とされ、子ども時代は早く終わるのが望ましいとされてきたのです。しかし、ルソーは「子どもを小さな大人」として見る社会通念を否定し、「子どもは大人ではない。子どもは子どもである」とする立場を打ち出しました。そして、子どもの自主性を重んじ、子どもの成長に即して子どもの能力を活用しながら教育をおこなうべきだと考えを示しました。『エミール』の中でルソーは、「人は子ども時代というものを知らない。・・・いつも子どもを大人に近づけることばかりに夢中になり、大人になるまでの子どもの状態がどのようなものであったかを考えようとはしない」と述べています。ルソーは、人間が、最初から完全な姿で生まれてくるのなら、社会の変化も人類の進歩もない。子どもが未熟で未完成な存在として生まれてくるからこそ、教育によって成長し、いまの大人を超えて新しい社会の担い手となることができるのであると述べました。そして、「子どもの発見」により、教育という活動が何なのかを明確化しました。こうして「教育学」が誕生したのです。

～感想～

色々調べてみてさらに教育に興味がわき、その中でも自分の教育スタイルを持てるように工夫などをして生徒たちの将来に役立てられるようにしたいです。

Ｃ

・私はルソーの教育思想の特質について調べました。ルソーは人間の理性や道徳性を信頼し、それらを育成することに価値を見いだしました。また、自然状態における人間の自由な主体を育成することにも価値を見いだしました。人間の自由な主体形成を目指したので、一切の強制や服従を否定し、自己保存、自己愛といった、近代自然法の原理によって、教育論を展開しながら、自由で自律的な主体形成を説いています。

ルソーは現実の堕落した社会をラディカルに改革し、その方法を人間教育に求めました。ですが、現実の社会は既に人間の手によって歪められていたため、この社会から距離を置く理想園で、現実の人々の偏見や権威や慣習などによって変質される前の自然な人間、すなわち「自然人」を作ろうと考えたそうです。そして、その「自然人」を市民のモデルとして社会に送り込み、この類いの人たちに悪と矛盾に充ちた社会の改革を期待しようとしていました。

エミール教育の青少年期での最大の特色は、自然が教える道に従って、「何一つしないで全てを成し遂げる」という消極的教育の方法があります。青少年期以降の積極的教育は当時一般に主張されていましたが、ルソーは消極的教育に重要な意義を見出していました。

現在、偏差値のみを重視しがちな受験体制ですが、ルソーの目から見れば、子どもに対して本人の意思に反して知識を無理に注入するべきでは無いと見えるだろう。ルソーは子どもの発達段階に応じて、心身の内発的発展を守り、知りたいという欲望を起こさせようとしていました。

また、知識の体系を教育によって系統的に教授しようとする考えに反対し、子どもの感覚や自発性を重んじて、活動意欲を喚起し、それを発展させようと主張しています。

ルソーがこうした主張をするのは、一定の年齢の子どもの持つ自然の善性を信じ、子供の立場にたとうとしているからです。

なぜ、世の中の親や教師はきびしく指導し、無邪気な幼い子どもたちの短い一時期を奪おうとするのか、大人が子ども時代を思い出し、理解することにより、人間的に子どもを取り扱うことが出来るはずです。だから、大人は子どもの遊びや楽しみを見守り、感性を大事にすることが大切です。

このようにルソーは子ども特有の見方、考え方、感じ方を認めています。ですが、それは自由奔放に繋がるもので、適度な教え込みは大切だが、主体的には自然な発育に従って、大いに鍛え上げなければならないとされています。

このことから私は、確かに親や先生から強制的な指導だけでは良くないと思います。強制的な指導でも学ぶことは出来ますが、やはり自身で考え、学んでいくことがより重要で、自身で学べた感も出ます。そしてその強制的な教えを教わった場合、将来大人になって子どもを育てる時にその教え方がまた再発してしまう恐れもあります。それが悪いサイクルになり、無邪気な幼い一時期を奪ってしまう結果になってしまいます。そのような繰り返しにならないように、現代の私たちが子ども時代を思い出し、自然な発育をに従いつつ、適度に教え込み、子どもの感性を育てていくことがとても大切なのだなと学びました。

Ｄ

　ルソーは啓蒙時代の申し子であり、18世紀のフランス絶対主義的身分制社会を徹底的に批判し、攻撃することで彼の存在感を高め得たことを知った。人間の本性を押さえつけず、人間の本性に従った教育のあり方を説くことで多くの支持を得て後に教育のあり方の改革にもつながったことがわかった。ルソーは、人間は生まれながらにして自由である。しかし今やいたるところで鎖につながれているという名言から現実の墜落した社会を批判しラディカルに改革し、その方法を人間教育に求めました。ルソーはこれらの教育と社会の改革をして人間の理想的な状態や幸福を自然の中で見だし、文明や社会による墜落から人間をいかに回復させていくかを追求しました。個人の利益を追求する意思と公共利益を求める意思は自由と平等を保障するために全員が従うことによって自由が保障されると考えそれにより特殊意思、全体意思を満たすことになると説いたルソーの思想は共感する個人に呼びかけるのではなく、全体が変わらないと何も変わらないと全体に呼びかけているところが良いと思った。だから全体の考えや思想の変化によって平等主義思想がフランス人権宣言に大きな影響を与えることができたんだと思った。特に教育の改革だと子どもを未完成の大人としてみるのではなく、子どもには大人の原理に置き換えられない固有の活動があり、自ら成長発達しょうとする内在的な能力が備わっていることを説いた。よって子どもの内なる自然に従って教育を行うべきだと主張したことを知った。確かに子どもにしかできない特有なものはあるのであまり厳しくしつけをして教育するのではなく少し放ち自由に活動する教育は大切だと思った。このことは現代でも問題として考えられているのでルソーのように内在的な能力の効果に目を向けることも大事だと考えた。ルソーは人間の本性について自由で平等な社会を築き上げるために人間と社会さらに子どもを特有の能力を持っているとして全ての人に自由な思想を持ち本性に従ったあり方を説いているので市民教育として成り立ってここまで浸透していると思いました。ルソーのような思想のあり方は自由で平等から差別などをなくすことにもつながっていて現在より多くの事柄に当てはまる思想だと思いました。ルソーの思想から人間本来の性質をそのまま生かすことが1番大切で人間それぞれ良さがあることがわかりました。

Ｅ

私は教育思想家の中でもルソーの教育思想の特質について授業ノートにもあるように３つの観点から説明していきたい。

まずはルソーの経歴や人間性についてだ。ジャン＝ジャック・ルソーは1712年6月28日、ジュネーヴ共和国に時計職人の子として産まれた。貧困層ではない中間的な職人階級の家に生まれたが、幸せな家庭環境や安定した人生に恵まれなかった。生後9日にして母が亡くなったため、父と祖母に育てられ、小説や歴史書を好んで読む少年期であった。1728年に親方からの罰への恐怖から出奔を決意し長く放浪生活を送ったが、ヴァランス夫人との出会いによりルソーは親子のような情愛を受け、学問と教養を身に付けることが出来た。その後、アカデミー賞の懸賞論文に応募した『学問芸術論』の入選により名声を得た。1753年にアカデミーが「人々の間における不平等の起源は何であるか、そしてそれは自然法によって容認されるか」という主題のもと懸賞論文を募った。そこでルソーが41歳にして書き上げた初の大作である『人間不平等起源論』はこの懸賞論文の解答でもあった。この続編である『社会契約論』もルソーの代表的な著書だ。その後、教育思想の傑作とも言われる『エミール』では理想となる教育プランを構想した。

次に教育思想の時代的背景についてである。まず教育思想とは教育について考えられたことを体系化したものであり、それは人間（子ども）をどうとらえるかという人間観（子ども観）によって基礎づけられている。ヨーロッパではルネサンスによって人間生活における旧いモデルが否定され、新しい生き方のモデルを探求しようとする時代の機運が高まった。このような時代の流れで、人間の本性を押さえつけず、人間の本性に従った教育の在り方を説く新しい人間観（子ども観）が誕生した。その代表といえるのが、放浪の思想家ともいわれたルソーである。

最後はルソーの教育思想自体についてだ。ルソーは子どもの自発性を重視し、子どもの発達段階に応じて、子どもの活動意欲を喚起させることで内発性を社会から守ることに主眼を置いた。また当時、子どもは完全な人間（一人前）とは認められていなかったが、ルソーは子どもを大人の世界から解放して考え子どもには固有の活動があるとした。さらに、大人は知識や技能を一方的に注入するのではなく、子どもの楽しみを好意的に見守り、子どもの感性を大切にするべきだという（消極的教育）。しかし、これは余計なことをしないということであって、何もしないという意味ではない。

初めは同じ誕生日ということで親近感がわきルソーについて調べたが、子どもの内発的発見の重要性を教育心理の授業で論理的に学んだため、ルソーの考えにはたいへん共感した。これからは内発性を児童が身に付けるための具体的な教育活動について調べ、考えていきたいと思う。

Ｆ

ペスタロッチは、貧しい民衆を救済するための拠り所に教育をもとめた。『隠者の夕暮れ』が有名。自然状態における人間の自由形成を目指し、一切に強制や服従を否定した。自己保存、自己愛といった近代自然法の原理によって教育論を展開しながら、自由で自律的な主体形成を説いた。近代の自由主義思想や自然権思想にもとづいて、教育が人間の基本的な権利であることを唱えた思想であった。

人間の内面を「陶治」することを目的とした近代的な教育学や教授学の構築に努力した。

人間の認識を数・形・語などのもっとも単純な要素に分解し、事物の表象を再構成する直観教授法を説いた。

ペスタロッチらの新教育運動の流れは、もとはといえばルソーの近代的子ども観・児童観に端を発している。

教授方法はペスタロッチ主義にみられるようなパターン化された教授法によって暗記・暗唱を繰り返す注入主義的なものとなった。カリキュラムや教科書という集団的な規律化を生み出し、教師は子供の学習の点検者や教室内の秩序維持をはかる管理者・監督者として、強圧的な訓練を強要した。

Ｇ

「幼児教育の母」ともいわれるモンテッソーリは、弟子のセガンの研究をヒントに得て、発達遅滞の治療に成功を収めた。この発達遅滞を一般児にも応用できるとし、1907年に「子どもの家」と名づけた施設をローマに開設した。就学前の子どもの教育を行い、「科学的教育学」の方法としての「モンテッソーリ・メゾット」の教育方法が用いられた。モンテッソーリとは、子どもの表す事実を丹念に観察して、自然によって与えられた内的な計画に基づいて行われると考えたものである。また、幼少期の「敏感期」と呼ばれる期間を上手に生かすため「環境の整備」に心を砕くべきと説いた。この「モンテッソーリ・メゾット」は世界中に普及していった。

Ｈ

・コメニウスの教育思想は、すべての人間、すべての国民に権利として公教育を普及させるというものである。「教育とは全人を開発することである」という教育目的を掲げている。

コメニウスは、人間の自然的な本性と教育による完成の可能性を考え、すべての青少年を組織的、効果的に教育するための学校教育制度の構築と合理的な教育方法を確立しようとした。

・コメニウスの教育論は「あらゆる人が、あらゆることを、あらゆる側面から教える」という言葉に集約されている。「あらゆる人」という理念について、コメニウスは自身の著書「大教授学」にて、「教育なくしては、人間は人間になることはできない」と述べており、あらゆる人間が生理的に知性と意思の行動の能力を備えているとし、人間は教育必要であるばかりではなく、教育可能であるとした。「あらゆること」という理念は、数ある知識の中から教育として何を学ぶかという意味であり、コメニウスは「大教授学」にて、「『あらゆる人が、現世と来世とで出会う重要なことがらのすべてについて、その基礎、根拠、目的をはっきりとつかむこと』が必要である」と述べている。「あらゆる側面」とは、教育の方法の普遍的面を差し、多面正に優れる教育を行うというものである。

コメニウスは、勉強が単調でつらいものであるのでなく、楽しくなるような学習形態を目指した。コメニウスは自身の提唱した教育形態を「汎教育」を意味する「パンパディ」と呼んだ。

Ｉ

今回のレポートで私はコンドルセを取り上げようと思います。コンドルセは18世紀のフランスで活躍した教育思想家です。当時のフランスは王権や宗教勢力が政治の中心である社会から主権が市民に移ったフランス革命が起きた時期で、コンドルセもまたフランス革命のさなか生きた人物です。彼は学校分布の平等性を説きました。ではこの学校分布とはどういうものなのでしょう。現在、私たちは各市町村に一校、小学校や中学校があり通うことができます。これはコンドルセの唱えた学校分布の平等性に基づくものだと考えられます。　コンドルセが唱えたものは小学校は原則人口400人を持つ村落ごと、中学校を各地方の中心都市や人口400人以上の町に、高等学校は各県に設置するものである。これは学校がバラバラに設置されることによって地方や町で教育格差が開いてしまう危険を排除でき、子どもたちに平等に教育を受けさせることができます。これからコンドルセの思想には自由と平等の精神が組み込まれていることが窺えます。この思想の背景には、冒頭で取り上げたフランス革命が背景にあります。フランス革命において、自由と平等の精神が提唱されており、コンドルセはこれを教育にも取り込むことを主張しました。これは宗教的権力などの外部権力からの干渉のない自由と、すべての人民に教育を開放する平等を指します。彼の残した思想は今を生きる我々が教育を平等に受けられる根幹になっていると考えられます。

Ｊ

私はアメリカが生んだ知の巨人ともいえる哲学者・教育学者であるデューイの教育思想について説明する。まずデューイは学校を｢小さな共同社会｣と捉えている。そうすることで、子どもたち一人一人が仮設を吟味しながら問題解決への見通しを立て、結果を検証する過程でお互いに協力し、批評しながら共同社会に生きる人間として、必要な知識と知恵を獲得していくことを期待したのである。

そしてこのような学習活動は、共同社会を維持・発展させるためには不可欠であり、自由で主体的な個人同士が責任を負いながら、共同体を支え合う民主主義の本質について理解を深めることも出来ると考えた。

また、伝統的な一斉授業中心の学校教育を、作業を中心とする活動的な学習の場に変えることの意義も解いた。

そして、今までの旧教育は｢重力の中心が子どもの外部にある｣と指摘し、重力の中心を移動させ、子どもが太陽であり教育の中心でなければならないと主張した。

デューイにおける学校教育とは、子どもたちが将来参加することになる成人社会において民主主義システムとルールを尊重し、問題解決と自己実現の家庭を通して、共同体を望ましい方向に発展させていくことを学習するための制度であるとした。

つまり、民主主義のための学校こそがデューイの目指した学校像となる。

またデューイは｢子どもが中心となり、その周りに教育についての装置が組織されるべき｣と述べており、新しい教育は児童が中心となることを高らかに宣言している。

また、学校とは今を犠牲にして将来に備える場所でもなければ、抽象的で非現実的な事柄を学ぶ場所でもないと考えており、学校とは子どもにとって生活と密接に結合し、生活を通して現実社会を学ぶ場所であるとした。

デューイはこうした学校を｢小型の共同社会や胎芽的な社会｣と呼んでいる。

デューイは、学校を子どもの興味を尊重した活動的な社会生活を結合し、一つの有機的な全体として位置づけたことがわかる。デューイの教育思想の根本は人間の生命や生活、一生を成長の過程と捉えることにあったのである。つまりデューイにおける教育の過程とは、未発達な存在としての子どもと人類の経験に具現化された社会的な価値の相互作用として進行するものであるといえる。